

神奈川県立博物館発掘調査報告書

第 16 号

師 岡 遺 跡 (3)

REPORT ON THE ARCHAEOLOGICAL EXCAVATIONS
BY KANAGAWA PREFECTURAL MUSEUM

No.16

MOROOKA(3)

神奈川県立博物館
KANAGAWA PREFECTURAL MUSEUM

Nakaku Yokohama Japan

1986

師岡遺跡（師岡貝塚）発掘調査報告(3)

本文目次

I. 師岡貝塚第3次調査	1
II. 調査概要	
1. 第3次調査地点	2
2. トレンチの状態	3
III. 遺物	
(1) 土器	5
(2) 貝刃	6
(3) 自然遺物	6
IV. 調査所見	7

挿図目次

第1図. 調査区域地形図	11
第2図. 第1トレンチ縦面実測図	12
第3図. 第2トレンチ縦面実測図	13
第4図. 土器拓本 (1)	15
第5図. 土器拓本 (2)	17

図版目次

図版1. (1) 調査地点遠景	
(2) 墓地境界断面の二次堆積状態	
図版2. (1) 第1トレンチ東壁	
(2) 第1トレンチ西壁	
図版3. (1) 第1トレンチ北壁	
(2) 第1トレンチ東壁(部分)	
図版4. (1) 第2トレンチ(北壁・東壁)	
(2) 第2トレンチ(東壁・南壁)	
図版5. 土器 (1) 縮尺5/8	
図版6. 土器 (2) 縮尺5/8	
図版7. 貝刃 縮尺不定	

調査主催者 神奈川県立博物館館長 田中雅夫

調査期日 昭和57年3月

発掘担当者 神奈川県立博物館専門学芸員 神澤勇一

報告書作成 専門学芸員 神澤勇一(本文)
主任学芸員 川口徳治朗(図版・図)

I. 師岡貝塚第3次調査

師岡貝塚の調査は、従来不明確であった同貝塚の実態を把握解明する目的で企画、昭和55年に第1次、翌56年に第2次調査を実施した。

第1次・第2次調査では、遺物と貝殻散布量が多く、貝塚存在の可能性が最も濃厚な熊野神社裏の台地東斜面上半部を発掘。現台地上面直下に縄文時代前期(諸磯b期主体)の斜面貝塚と、その下端上に一部重複した縄文時代中期(勝坂期)の貝塚の存在を確認した。調査結果は既に「神奈川県立博物館発掘調査報告書(13号~15号)」概要を報告したとおりで、発掘所見から判断して、それらが兼ねてから師岡貝塚と称されていたものの主体であることは、ほぼ誤りないと考えられた。

しかしながら、この台地上には以前から数箇所に貝殻の散布箇所があったという伝承が残されているほか、かつて鶴見川流域の貝塚群を調査した酒詰伸男氏の論文にも(簡略な記述のため詳細不明ながら)師岡貝塚は熊野神社裏山に存在する3箇所の小貝塚が存在するとあり、すべて諸磯期に属する旨、報告されている。

この点については現在、台地と周辺一帯の自然地形ならびに環境が著しく変化し、原状をほとんど失っているため、地表面の調査による当否の確認は事実上不可能である。

ただ前2回の調査区域中、北側のSE、SD両トレンチでは、混貝土層の大半が上方から転落した土器・石器およびかなり多量の貝殻片の二次的堆積であった。しかし、現地形では台地頂部は削平され、発掘区北側はおおよそ15m強の位置から市道建設時の法が始まり、別個の貝塚が存在した確かな痕跡はない。

しかしながら、酒詰伸男氏の論文には記述されていないが、同台地西斜面中段に1箇所、僅かながら貝殻と土器小破片が散漫に散布した地点が存在する。同所採集資料は微量ながら明らかに先史時代に属するものであり、散布状態に多少疑問な点はあるが、前述の伝承や報告との関係で一応調査の必要を認めたため、この部分を対象に調査を企画、実施した。しかし、後述のように結果的には同地点には貝塚は存在せず、二次的堆積箇所すぎなかったが、いわゆる師岡貝塚(群?)の存否解明資料として重要であるので、以下、簡単に調査結果を報告し、これをもって、師岡貝塚の調査を一応終えることにしたい。

II. 調査概要

1. 第3次調査地点

今回の調査対象箇所は、第1次・第2次発掘を実施した東斜面調査区の西約60m、第1図に平行破線列で示した部分である。この地点は現在、住宅群・(法華寺)墓地の一部および山林にわたり、貝殻ならびに遺物の散布範囲はおおよそ東西30m、南北20mにわたっているが、散布密度は散漫で、主体部を特定し難い。補足すれば、この部分は台地を東西に横断して建設された市道を境にして南側は住宅地から法華寺墓地の東端、東西約20m、南北10m、東側は竹藪とかなり粗な樹林に覆われた斜面に移行している(図版1—(1))。このうち、法華寺墓地南側は落差5~7mの崖面をなし、東端は台地斜面末端を削った高さ約2m、長さ6m強の崖となり、土地居住者の談から前者は下方の畑地開墾、後者は過去に墓域と山林の区画りの結果生じたことが明白である。このうち墓地東端の崖の断面では全体に破砕度の高い貝殻片と少量の微細な土器片が露出するが、それらを包含する層は腐植土を含む褐色土層を主体に火山灰と少量の黄褐色ローム質土層(関東ローム層上部軟質部)が混着状態で雑然と堆積し、明確な層は認められず緊りもきわめて軟弱であり、かつ、江戸時代の陶器片が混入するなどの点で明らかに二次堆積と断定できる(図版1—(2))。宅地と墓地の地表面の一部に散在する遺物・貝殻片の散布も念のため調査したが、それらは二次堆積の一部または崖面切削に伴う拡散の結果の何れかであることを確認した。

次に墓地崖面に直接する台地斜面の状態であるが、ここでは各所に、かつて貝塚を形成していたことの確実な貝殻片が散在したが、それらは樹木や笹の根元の凹所などに引っ掛けて留った状態で、一般に関東ローム層上部の軟質部(この層は下部の硬質部に続き、一応安定した層と言える)上に直接堆積、暗褐色土層等は欠失しているのも、同様に二次堆積の結果であることが明白であった。

地形図と照合すると、以上に述べた付近は東側斜面ならびに西側斜面南半に比べ、等高線の間隔が広くかなり不自然な緩斜面をなしている点、相当の地滑りがあったことは疑問の余地がないが、この点について直接、時期、原因を明示する形跡を欠く。

しかし、西斜面貝殻散布地点の南半では、等高線は、ほぼ安定した形をなし、東斜面等高34~36付近に存在した狭いテラス状平坦部に相当すると考えられる部分があり、地表面の状態も比較的近似し、貝塚存在の可能性が多少予測された。そこで、第3次調査ではこの箇所を重点的に調査することにしたが、排土の置場がなく、かつ西側は前述の開墾と法華寺建立のさいに切削された平均7mの落差をもつ崖となっており、崖崩れの危険性が多かった。こうした条件から調査は平坦面に沿い、南北方向に10×2mのトレンチ設定を計画したが、当初発掘に着手した南半部の上層堆積状態が予想外に不安定であり、全掘した場合、西側縁辺の崩落が懸念されたので予定を変更、2mの区間は残し、その北側の2mを発掘するに止め、便宜上南側6×2mの範囲を第1トレンチ、北側2×2mの範囲を第2トレンチとして区分した。第1トレン

子南端と第2トレンチ北端は前述の如く10mの距離にすぎず、調査所見でも層序の基本的な差異が認められなかったので、以下、一括して説明する。

2. トレンチの状態(第1トレンチ—第2図, 図版2・3, 第2トレンチ—第3図, 図版4)

実測図に示したように、第2トレンチと第1トレンチの地表面は、南側と西側に傾斜しているが、特に第2トレンチと発掘中止箇所付近は留状に盛り上がり、また第1トレンチ南端から2~3mの部分ではやや急斜面をなしていた。第2トレンチ東北隅と第1トレンチ東南隅の落差は単純計算で1.2mを計るが未発掘部分をも加えて通観すると、2箇所が緩やかな段状をなし、南側に向け漸移的に標高が減っている。また、以下の各層も、ごく狭い発掘範囲であるにもかかわらず、一部消滅や断続、厚さの不定および境界の不鮮明な個所が少なからず存在、堆積状態は全体に不安定であったが、一応Ⅰ~Ⅶの7層に区分できる。各層の概要は次のとおりであった。

第Ⅰ層(表土)—腐植土を主体に、若干の小角礫(1×1cm~5×5cm大)が混入した黒褐色土層で、破砕した貝殻の小片を僅かに含む。粘質度が比較的少なく、粗粒状を呈する。第1トレンチ東壁では、第2図に示した如く、平均10~20cmの堆積を示すが南端に至らずに消滅、また西壁では南西隅に僅かな堆積が認められるにすぎない。本層は第2トレンチにも存在していたがここでは貝殻片を包含せず、両トレンチを通じ遺物は全く出土しなかった。なお、第2トレンチにおいては、Ⅰ層直下に幾分黒ずんだ同質の土層が堆積していたが本質的な差異は認められず、Ⅰ層の一部と理解して扱った。

第Ⅱ層(泥貝土層)—第Ⅰ層と同質の褐色土層を主体とする比較的少量の貝殻と少量の土器破片を包含する。第1・第2トレンチ全体に堆積し、特に第1トレンチでは厚く堆積、最大40cm前後を示すが、全体に緊りが弱く、また各所に関東ローム層上部の軟質部から遊離した、大小の関東ローム上のブロックが嵌入。特に第1トレンチに著るしく、一部は第Ⅲ層上に直接堆積していた。以上の点からみて本層は二次堆積層と考えられるが、褐色土中に包含された貝殻は遺存状態が比較的良好で二枚目では殻が結合したまま包含された例が少くない。出土遺物は土器と貝刃のみであって、土器は縄文式土器(前期・中期)、弥生式土器(後期)および土師式土器(古式?)の小破片が混在したが、出土状態に一定の傾向は認められず、型式を明確に把握し難い例が大部分であった。なお遺物を包含したのは本層と後述する第Ⅳ層のみである。

貝類ではハイガイが最も多く、ハマグリ、オキシジミが比較的多目だった。

第Ⅲ層(暗緑色砂層)—粗粒の土砂層。いわゆる山砂の範疇に入るもので、多少粘土の混った個所はあるが、粘質性は弱い。第1トレンチのほぼ全域に堆積し、南側と西側では漸次的に厚さを減じる。また、第1トレンチ北壁断面にみられるように、この層は未発掘箇所へ伸びているけれども第2トレンチでは認められず、未発掘部以南の一部に堆積するものらしい。壁面実測図に表れた部分は一応安定した堆積状態を示すが、全体的には緩やかな凹凸をもち、厚さも不定であり、この点は本層の土砂の性質に由来するところが大きいと思われる。

貝殻および遺物は全く検出されなかった。

第Ⅳ層(暗褐色土層)＝有機物と軟質の小角礫(1×2～3×5cm前後)少量を含む層。第1トレンチ全域と第2トレンチの南半までは確実に存在、北半では消滅してしまう。第Ⅲ層と同様、第1トレンチ付近が中心であるらしく、堆積は最も厚い個所で20～30cmを測るが、それは主に直下に堆積するⅤ層(粘質暗褐色土層上面の凹所に当る部分で、位置により層の厚さがかなり異なる。なお、第Ⅳ層と第Ⅴ層は、前者が粘性が少なく色調においても幾分薄い点を除き、酷似しており、実際に両層の境界を明確に識別し難い個所が存在した。第2トレンチでは第Ⅴ層上に直接堆積する。

遺物はごく少数の縄文式土器破片が上端より約10～15cmまでの間から散漫に出土した。しかし、すべて細片であって型式的特徴を備えた例はない。辛うじて、前期および中期に属する土器と判定し得るのみである。

第Ⅴ層(黒色火山灰層)＝黒色を呈し、粒子がきわめて粗い火山灰の純粋な堆積層。北端を除く第2トレンチ全面と第1トレンチ北東端において、Ⅳ層とⅥ層の間にレンズ状に嵌入している。本層は組成によって、宝永4年(1707)の富士山噴火の際の降灰(いわゆる宝永火山灰)と確認できた。遺物、貝殻を全く含まない。

なお、調査地点における本層存在付近の堆積状態はきわめて不自然であり、第1トレンチ北端では安定した堆積を示す第Ⅵ層(粘質暗褐色土層とその上部の暗褐色土層との間に介在する)にもかかわらず、第2トレンチでは第Ⅵ層を欠き、第Ⅴ層の関東ローム土層(これも安定した堆積層上に直接載っている。こうした点から、第2トレンチ付近の留状に盛上った個所は本来の地形ではなく、傾向上方から土砂が集中的に崩落(第1トレンチの一部もその影響を受けたであろうが)、本来の層序が乱れ、そのさい宝永火山灰層の一部が斜面凹所に堆積したものとしか考え難い。関連して、第Ⅳ層の褐色土層も第2トレンチ南端から第1トレンチ北端付近では、本来の堆積順序を失っているものと推定せざるを得ない。第2トレンチ及び未発掘部が前述のように一段盛り上がった地形を示していることを考えると、この部位を中心に斜面の崩落が生じ、層序の正常な堆積が乱れたと推測できる。それは宝永火山爆発以後、おそらくは大正12年(1923)の関東大地震のさい生じた公算が大と考えられるものの、以後の台頂部周辺に加えられた削平の影響も少なくなかったであろう。現地地形図における北西斜面の緩傾斜が旧地形図では現れていない点も、それを裏付けるものであろう。とすれば、東斜面調査区域も影響も受けたと思われるが、特に異常が認められなかったのは台地地形、岩盤の傾斜度の相違により影響差があったかも知れない。

第Ⅵ層(関東ローム土層)＝関東ローム層上端の軟質部で、聚りも良く良好な堆積状態を示し原位置を動いた形跡は認められなかった。第1トレンチの場合、下半は安定した暗褐色粘質土層の堆積が深いため、僅かにボーリングステッキの刺突により存在が確認されたにすぎないが、下方では固く聚っており、軟質部上半の一部が崩落したとしても、これが安定した本来の層で

あることは疑問の余地がない。本地地堆積土の基盤をなす層であることは確実である。

第2トレンチでは、同層を若干掘り下げたが、遺物、貝殻等の包含は全く認められなかった。

Ⅲ. 遺 物

人工遺物、自然遺物の出土は、前章に述べたとおり非常に少量で、遺存状態も悪く、発掘前の地表面の所見からは、予想外の結果であった。

出土層位は第Ⅰ層(表土層)、第Ⅱ層(褐色土層)および第Ⅳ層(粘質褐色土層——上端部のみ——)であった。また、以上に挙げた3層中、出土量が多かったのは第Ⅱ層である。

人工遺物は土器破片(3層の総量で小型整理箱——32×20×6cm大、約5個分)と貝刃6点にすぎなかった。このうち、土器破片は図、図版に示したもののほか若干例を除き、他はすべて微細な破片で、縄文時代前期の土器破片が主をなすことは明らかであるが、遺存状態も悪く、型式をほとんど判定し難い。その他では、縄文時代中期、弥生時代後期および土師式土器が各10片前後出土した。しかし、それらの出土状態をみると、層ごとに、あるいは同一層内における出土位置の差や特定の傾向は全く認められず、完全な混在状態を示し、台地東斜面各地点の混貝土層とは著しく異なっている。

自然遺物は貝類のみで、鳥骨・獣骨・魚骨の出土は皆無であった。混貝土層であるうえ、貝殻の混入が僅少なため、腐蝕し、遺存しなかったものと考えられる。

以下、人工遺物、自然遺物について述べるが、いま述べたような出土状態と遺存状態のため、詳細な分離は不可能であり、さほど意味があるとは考えられないので、不本意ながら一括、概略を述べることにしたい。

以下、図および図版に示した遺物番号は共通である。説明文中「出土層位不明」と表記した遺物は、第1トレンチ第Ⅰ層(表土層)と同第Ⅱ層(褐色土層)の排土中より検出したものだけで、他層および第2トレンチ出土遺物は含んでいない。

(1) 土 器 (第4図—図版5・1—20、第5図—図版6・21—44)

図、図版では縄文式土器、弥生式土器および土師式土器の主要な例を一括して示した。以下、その順に簡単に記述する。

縄文式土器としては、前期・中期の2時期の土器が認められ、前者がほとんどを占めている。

前期の土器については型式の特徴を欠く例が多く、不確実な点もあるが、器形、文様構成、器面の処理と状態、胎土等から総合的に判断すると、一応、関山式土器、諸磯a式土器、諸磯b式土器の存在が明らかであり、他に黒浜式土器の疑いがある数片が認められるが、断定し難い。このうち、数的に多いのは関山式土器で約80%を占める(1—20)。諸磯a式土器と見做し得る例は21—24・34。このうち、21は表面が丹彩されている。諸磯b式土器は25—33。以上3

型式の器形はいずれも深鉢形を呈するものと考えてよからう。

中期の土器はあまり明瞭でないが、35・37～40がある。このうち36は口縁部破片で、口縁が内湾し器体のカーブがきわめて緩やかな点、大型浅鉢形土器の可能性が多い。36以外は、図示した破片をも含め、すべて鉢形土器と考えられるものである。

弥生式土器と土師式土器は例数が少く、小破片のうえ遺存状態が劣悪で、僅かに41～44の4点を図示し得るにすぎない。このうち、41～43は弥生式土器で、41は壺形土器口縁部、42は胴部上半部破片、43は菱形土器胴部破片である。型式認定の決め手に乏しいが、弥生時代後期、久ヶ原式土器～弥生町式土器と考えられる。

44は高杯形土器の脚部破片で、円孔を有する。色調、胎土および器面調整状態からみて、五領式土器ではないかと思われる。前野町式土器に類似した点もあるが、一応、土師式土器として扱った。

(2) 貝 刃 (図版7・45～50)

出土数6点。出土層位別例数は第1トレンチ第Ⅱ層(混貝土層)＝4例(45・46・49・50)、層位不明＝2例(47・48)であるが、後者は第1トレンチ第Ⅰ層(表土層)と第Ⅱ層(混貝土層)の排土中から検出された。

6点の時期は、貝刃の製作手法、出土部位、同層において縄文時代前期、特に関山式土器が多く、他型式土器の微量出土はあるが、縄文時代前期の所産と考えて誤りない。

貝の種類ではハマグリ5例、カガミガイ1例である。刃部の形成はすべて殻内面側からの押圧剥離によっているが、45・46の2例以外はかなり粗雑である。外面の使用痕は45・46・50に、やや明瞭に認められるが、貝刃の一般例に比べて少なく、おそらく短期間使用後、廃棄された結果と考えられる。

(3) 自然遺物

貝類のみで、第Ⅱ層(混貝土層)中に比較的包含が多かった。微細に破砕した殻が圧倒的であるが、人為的な点は認められない。

確認できた種類は次のとおりである。

二枚貝＝ハイガイ、ハマグリ、サルボウ、カガミガイ、オキシジミ、シオフキ、マガキ。計7種。

巻貝＝アカニシ、イボニシ、ツメタガイ、ウミナ。計4種。

出土量は二枚貝が多く、ハイガイ、ハマグリ、オキシジミが主であり、カガミガイがこれに次ぐが、他はごく少い。巻貝は偶発的に検出されただけで、ほぼアカニシに限られている。

土層の状態は不良で、貝殻の破砕も著しいが、種別の出土傾向においては、台地東斜面の縄文時代前期の遺物を含む混貝土層と共通性が認められる。したがって大部分は、前期に捕食されたものであろう。

なお、本地点における貝殻の著しい破砕状態は、通常の混貝土層にはみられぬ程であり、後述するように、本来、台地上方にあった混貝土層が崩落、二次堆積した結果という可能性が大である。

IV. 調査所見

第3次調査の結果概要は以上に述べたとおりである。今回の調査は本台地上の數個所に貝塚が存在するという過去の記録・伝承記録に基づき、その地点確認と実態を主目的とし、また、西側斜面の貝殻散布地域がそれに該当するものか、或いは別個の貝塚であるかを確認するために実施した。

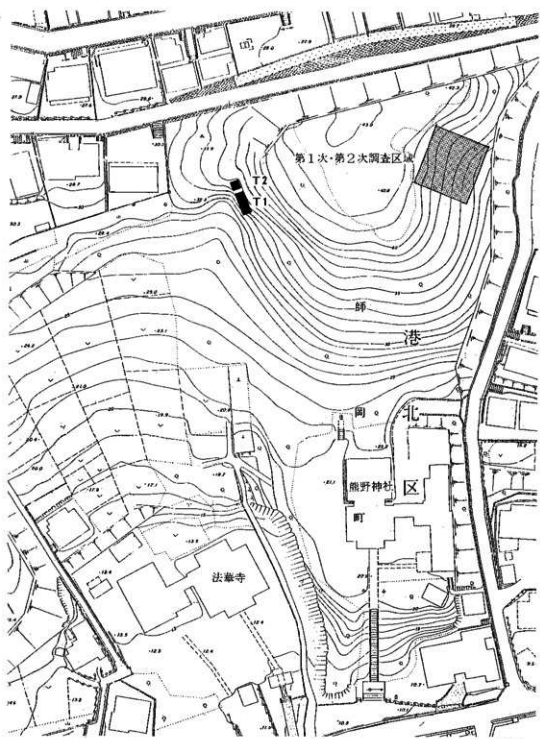
しかし、第1トレンチおよび第2トレンチ壁面に露出した各層の堆積状態はきわめて乱雑であった。第IV層（粘質褐色土層）と第VI層（関東ローム層）以外は不安定で、その堆積状態は、台地上方から斜面を崩落堆積した二次的堆積層と判断される。それを最も良く示すのは第V層（黒色火山灰層）である。なお、第I層（表土層）、第II層（混貝土層）および第IV層中に含まれた人工遺物と貝殻片も、本来の位置から土砂と共に転落、二次堆積したものと考えられ、こうした結果と地形を重ね合わせると西側斜面には貝塚存在の可能性は無いと判断せざるを得ない。

ただ問題になるのは、前記3層中の人工遺物および貝塚を構成していたことは疑い自然遺物の理解である。この点は、旧地形図と現状を比較すると、現在は明らかに削平され（山林公園の建設以前——少なくとも昭和30年前後には）既に原状が失われていることが知られる。したがって、かつては丘頂付近に小貝塚が存在し、削平のさい遺物が東西斜面に投棄または崩落した結果ではないかという推定を完全に捨て切れぬ。東斜面SDトレンチ、SGトレンチの混貝土層や二次堆積を思わせる上部混貝土層の状況もそれを裏付けよう。

3回にわたる発掘調査の結果では、結局、東斜面に前期、中期の貝塚を確認したに止まった。かつて數個所存在したと伝えられる貝塚については、酒詰伸男氏の報告した時点に比べ、台地の半ばが切削され、周辺の開発宅地化の進行などを考え合わせると、既に消滅し去った可能性が大きいのと思われる。

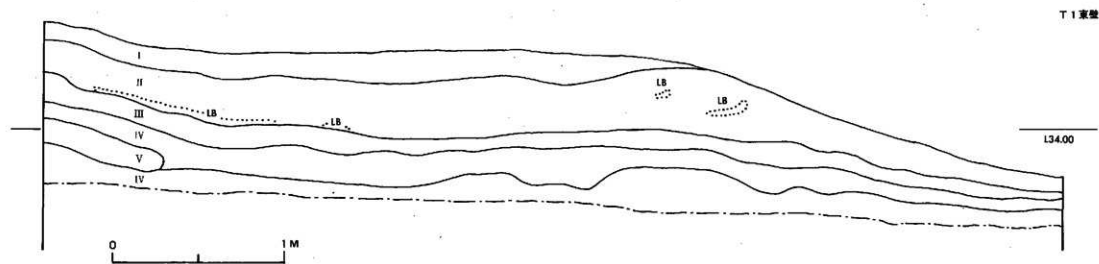
稿を終るに当たり、師岡貝塚発掘調査に一方ならぬご援助を賜った熊野神社宮司石川正人氏、第3次調査に参加した学生諸君に厚く感謝の意を表する次第である。

なお、第1次～第3次調査の資料は、引き続き整理、検討のうえ、折をみて発表する予定である。



第1図 調査区域地形図

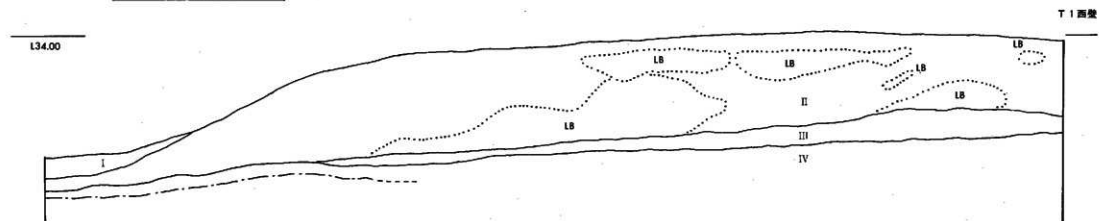
0 50M



T1東壁

L34.00

0 1 M



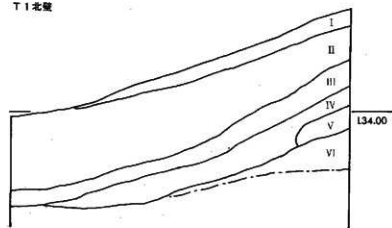
T1西壁

L34.00

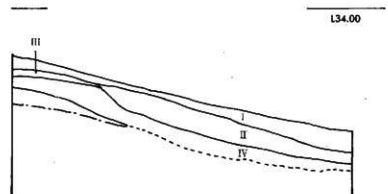
T1北壁

T1南壁

- I—表土
- II—混雑土層
- III—暗緑色砂層
- IV—暗褐色土層
- V—黒色火山灰層
- VI—粘質暗褐色土層
- LB—ロームブロック
- 以下未探

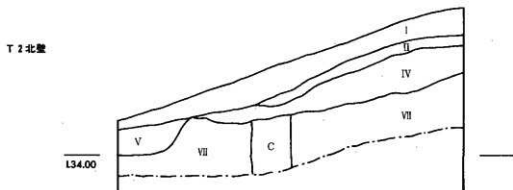
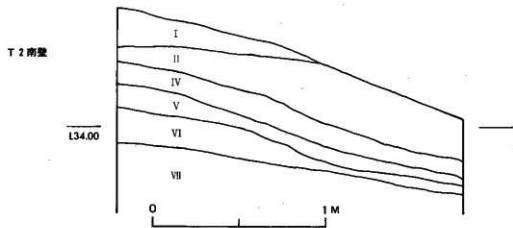
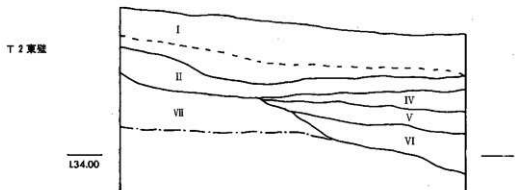


L34.00



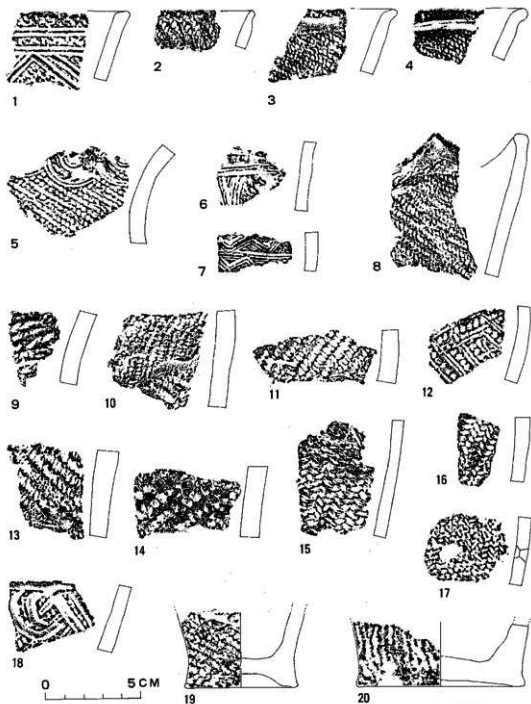
L34.00

第2図 第1トレンチ壁面実測図

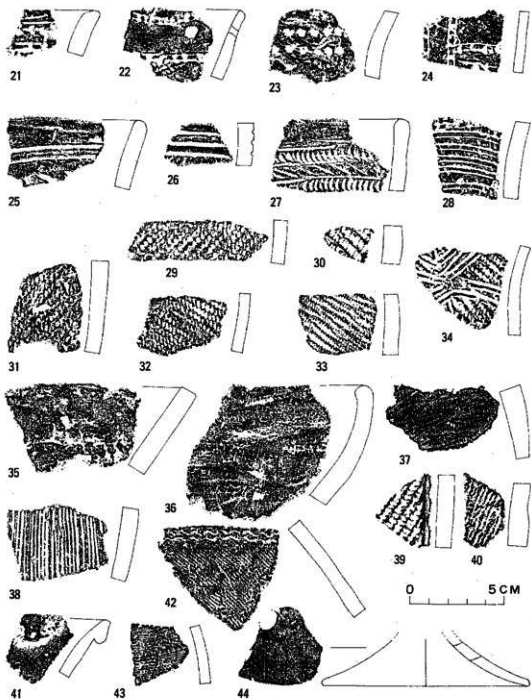


- | | | |
|----------|------------|------------|
| I—表土 | II—混貝土層 | IV—暗褐色土層 |
| V—黑色火山灰層 | VI—粘質暗褐色土層 | VII—関東ローム層 |
| C—攪乱箇所 | ----- | 以下未発掘 |

第3図 第2トレンチ壁面実測図



第4図 層位別：第1トレンチ混貝土層=3・5・13~15・19・20。 第2トレンチ混貝土層=1・2・7・8・10~12・16・18。 第1トレンチ・第2トレンチ表土=4・6・9・17。
 時期別：縄文時代前期=1~20。



第5圖 層位別：第1トレンチ混貝土層—21・23・26・27・29・33・35・36・38—40・43・44。
 第2トレンチ混貝土層—22・24・25・28・30・32・37・41。第1トレンチ・
 第2トレンチ表土—31・34・42。器面丹彩(外面)—22。
 時期別：縄文時代前期—21～34。縄文時代中期—35～40。弥生時代—41～43。
 古墳時代—44。



(1) 調査地点遠景



(2) 墓地境界断面の二次堆積状態



(1) 第1トレンチ東壁



(2) 第1トレンチ西壁



(1) 第1トレンチ北壁



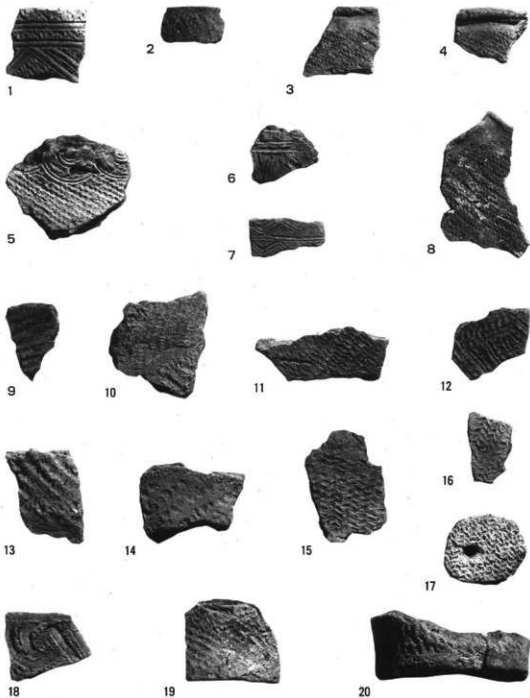
(2) 第1トレンチ東壁(部分)



(1) 第2トレンチ(北壁・東壁)

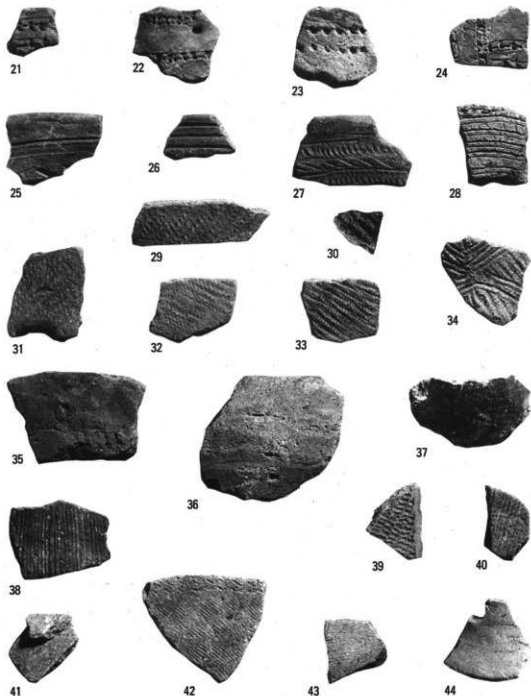


(2) 第2トレンチ(東壁・南壁)



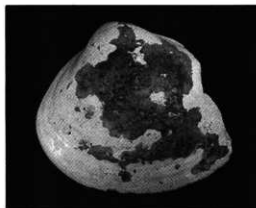
土器(1) 層位別：第1トレンチ混貝土層—3・5・13~15・19・20。 第2トレンチ混貝土層—
1・2・7・8・10~12・16・18。 第1トレンチ・第2トレンチ表土—4・
6・9・17。

縮尺 1:2 時期別：縄文時代前期—1~20。

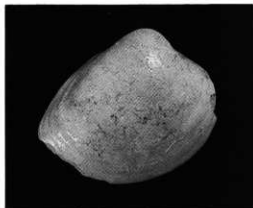


土器(2) 層位別：第1トレンチ第II層(混貝土層)＝21・23・26・27・29・33・35・36・38～40・43・44。
 第2トレンチ混貝土層＝22・24・25・28・30・32・37・41。・37・41。
 第1トレンチ・第2トレンチII層＝31・34・42。 器面丹彩(外面)＝22。
 時期別：縄文時代前期＝21～34。 縄文時代中期＝35～40。 弥生時代＝41～43。
 古墳時代＝44。

縮尺 1:2



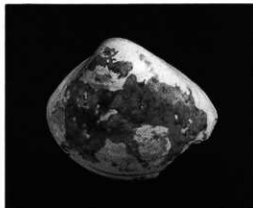
45 (69)×58×22mm



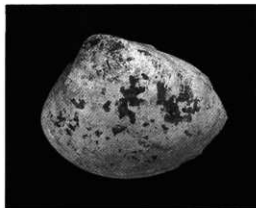
46 64×49×20mm



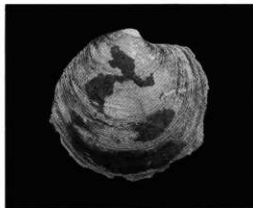
47 (44)×35×12mm



48 60×48×16mm



49 59×51×15mm



50 57×52×15mm

貝刃 出土層位：第1トレンチ第II層—45・46・49・50.

第1トレンチ層位不明—47・48.

貝類種別：ハマグリ—45～49. カガミガイ—50.

神奈川県立博物館発掘調査報告書
第 16 号

昭和61年3月25日印刷

昭和61年3月29日発行

編集兼発行者 神奈川県立博物館
館長 前場 廣
横浜市中区南仲通り5-60

印刷所 東邦印刷株式会社
横浜市南区高根町3-18